

翻 訳

【史料】19世紀後半のマルタと その産業面での障害について

——N・ザミット(編)『マルタとその産業』(1886年)(3)——

水 田 大 紀

〔文献解題〕

本稿は、『歴史学部論集』第7号(113-122頁、2017年3月刊)、第9号(83-107頁、2019年3月刊)に続き、『マルタとその産業』(1886年)の序論と第3章を訳出したものである。訳出の目的や本書の書誌情報など詳細については、前掲号までの文献解題を参照されたい。

原著の『マルタとその産業』は、1886年にロンドンで開催された「イギリス植民地およびインド領の産業博覧会」に向け、イギリスへの情報提供を目的に編集された。当時、経済的に厳しい状態におかれていたマルタ側からの主張として、本書では特に、イギリス国内でのマルタの有用性や産業面での潜在力を示すことに力点がおかれた。

今回の訳出箇所では、19世紀後半にマルタがおかれた状況と、その産業振興を阻んでいる諸要素が述べられている。その意味で、これらの章は本書のなかでも、その編集意図の起点を解説した部分といえ、この2つの章を通じて、我々は当時のマルタ行政参事会や有識者たちの「現状認識」について理解することができる。

なお本稿内の註は原著のものであり、史料内の〔 〕内は訳者による付記である。

【史料翻訳】

序論——マルタとそこに住まう人々

我々がその生産力についての考察を企図している大地とその住民は、社会的および倫理的観点から評価した場合、興味の尽きない対象である。彼らについてほんの些細な知識しか持たない旅行者たちは、自分自身を以下のように描きたがってきた。つまり、マルタに関する著しく虚偽に満ちた説明を学んでから彼の海岸に降り立った来訪者たちは、いつの間にか自分が太陽に漂白された岩々の間にある居住可能な岩礁のうえで、奴隷連中の真っ只中に佇んでいることを期待するのである。銃眼付きの武装胸壁だけが途切れさせてはいるものの、切り立った崖に

近づきたい砲塔を備えた海岸線をもつ、この小さいながら有名な島は、他者にとっては難攻不落の要塞地に他ならない。そのため、知性や文明、芸術といったものがこれらの地域ではまさに求められているのだ、と来訪者たちは思うのだ。

我々への幾ばくかの謝罪を欲しているわけでも、さもなければそういった民族誌的な虚偽伝聞から自分たちを守ろうとしているわけでもなく、ここで我々が打ち見するのは、今回のテーマである当地の産業に関連する、この大地と住民についてのことのみである。

巨大火山を有するシチリア島は、操舵手が水平線に視線を投げかけ、船がどんどん進む先にある陸地の、かすかに見える輪郭を観察するとき、その視野から外れることはほとんどない。澄み渡った青空を背景に小規模な諸島群がすぐに姿を現すが、その次に見えてくるのがマルタ島、ゴゾ島、コミノ島である。マルタ列島中最小にして、他の小島同様に岩がち、かつ聖パウロの難破の舞台として聖書に書き記された、最後に述べた島〔コミノ〕を除いて、今回はより大きく、最も重要な2島について触れるにとどめよう。

これらの人口密度が高い島々のうち、1万9千人の人口が暮らすゴゾは、姉妹島と比べてより麗しく魅力にあふれている。地質学上、より牧歌的な景観をもったマルタとは異なっているが、まるで円錐丘で取り巻かれたような大地はその平野部や溪谷においてより肥沃である。気候は温暖で健康的である。村々は野原の中や丘の上に点在している。中央の台地には、古代の町の廃墟と化した砦が大聖堂や公共の建物を包含しつつ残っており、その外側には大規模な郊外住宅地域や、いってみれば島でいうところの町が存在している。カリプソの洞窟で有名ではあるが、ユリシーズの息子の冒険とニンフたちの魅惑的な住み処を想起させる痕跡は全て、完全に消えてなくなっている。ただしその近くには、巨大な聖堂や先史時代の最も著名な古代記念碑といった古典的な遺跡が未だに現存している。また幅5マイルの水道が2島を隔てている。

ゴゾの2倍の面積を持つマルタは二分されていて、町や村々でひしめき合う東部と専ら耕作に充てられた西部というように、それぞれに異なっている。トルコ人の侵略によって島が昔のようになることを恐れ、人数はそれほど多くないものの、住民たちは窮地に追い込まれた際、防護に適した場所にいるよう一ヵ所に固まったのである。5つの要塞を持つ町と6つの人口密度が高い郊外住宅地域、23の村々が、全人口14万人とともに、この地区に散在している。

島の小高い中央部には、かつてはよく知られた中心都市が建てられており、古さではローマにさえ比肩するほどである。幾世紀にもわたる時間の経過や野蛮な征服者たちによる破壊行為も、その古の輝きの痕跡全てを消し去るには十分ではなかった。60世代以上を経てもなお、遺跡が完全に姿を消すことはなかった。収監された十二使徒の獄舎と隣り合わせになったアポロン神とプロセルピーヌ女神の神殿の、大理石でできた遺構の下には、初期に迫害されたキリスト教徒の地下納骨堂が彼らの墓標や正餐台とともに存在しているし、かつては群れなす野蛮人たちの攻撃に立派に持ちこたえて余りあった要塞の、廃墟と化した城壁の内部には、古き使徒の大聖堂が残っている。

この小さき島の至る所で、過去の時代を想起させる古代の記念碑を見つけることができる。アフリカ大陸側の海に面した岩だらけの海岸からさほど離れていないところでは、有名な古代ないしは先史時代の遺跡が目に入る。広大な神殿の遺構はゴゾの巨大建築物と同種のものである。囲い地を隠す役目を果たす壁の他、小部屋や聖廟、形の崩れた神像とともに、現在発掘中の基壇を要素として大建造物群は構築されていたのであり、全てのものが過去を想起するのに役に立つ。そのため考古学者の好奇心を刺激できるものなら、何でもこの地でみつけれられる。島の東海岸にある入江は、ヘラクレス・シリウス（Hercules Tirius）崇拝にあてられた、未調査の遺構である別の神殿により統治されていた。それらの遺跡は近接して現存しており、別の場所には神託神殿跡が、そして目にみえる根拠とともに、ローマ帝国初期以来の起源と教化を誇りうる、この島の民の文明化ぶりを裏付けるフェニキアやエジプト、ギリシア、ローマといった時代の墓所や記念碑などの遺構がそこここに存在している。

時と人が全てを荒廃させる。現在の生活様式は過去の記憶の全てを拭い去り、完全に消え去った古き廃墟のうえには、今は我が同胞の掘立小屋が誇らしげに建てられている。

1565年のマルタ包囲戦後に都市を創設した有名な戦士〔聖ヨハネ騎士団（のちのマルタ騎士団）の総長ジャン・ド・ヴァレット（Jean Parisot de Valette, 在任期間：1557-1568年）〕に因んで名づけられた現在の首都であるヴァレッタは、都市を難攻不落のものにしている砦や稜堡、高い壁によって取り囲まれた、素晴らしい牙城である。内部は外観の軍隊らしい厳めしさとは鮮明な対照をなしている。互いに直角に交わる街路、建造物の華麗な壮大さ、市場や店々、礼拝所、そしてかつては最高位のヨーロッパ貴族の邸宅であった風格ある宿泊所の美しさや上品さ、それら全てがまさに固有の独自性を生み出すのに役立っている。ずっと広がる海の間に建っているヴァレッタには、起伏に富んだ地面に続いて、平らな地点と上り坂がある。マルタ騎士団が支配していた数世紀の間、総長はこの町に、島の他の地域同様、彼らが行った豪華な贅沢の不滅の痕跡を残した。

かつての総長たちのように、壮麗さにおいて控えめであった聖ヨハネ教会は、堂々とした芸術作品で豪華に飾り立てられた。おそらく世界中を探しても同種のものでは勝るものがない大理石やつづれ織りの品々、数多の最も勇敢な十字架の守護者たちの壮大な霊廟や墓碑がこの地でみつかるのである。そのような荘厳な雰囲気の中に囲まれていては、評判の良い在地の芸術家たちによって創作された優れた絵画や彫刻の作品は、いかに優れていようと望まれないのである。現在これらを所有する女王陛下の代理人が坐す総長館は、見事な絵画と豊富な武器を有している。そしてこの大建造物の正面にあるのが都市で最も重要な「柱廊」であり、そこにはドーリス式列柱の上に掲げられた獅子と一角獣の盾のもと、不屈の海の女王にこの国を贈ったマルタ人の愛とヨーロッパの声とを記念した碑文が刻まれている⁽¹⁾。

正確に言えば、ヴァレッタは単なる島の中心都市ではない。マルタの五重首府（そのように呼ばれることもある）には、ヴァレッタ、主要港の反対側にあるそれぞれ独特な名を冠した3

つの大副都、要塞化した郊外居住地が含まれている。

ヴァレッタを訪れた旅人は、ボスポラスを例外として、おそらくヨーロッパにおいて凌ぐものがない、バラックカからの美しい景色を忘れることはできない。5つの入江をもつ港湾全域や、ひしめき合うように大人数で暮らす数多くの家々がある3つの都市が建てられた周囲の海浜を視界に収める、この高台からの一望は絵画のようにこの上なく美しい。

生活のための船荷を載せて絶え間なく行き来する幾多の遊覧船や連絡船、港で停泊中の、数えきれないほどの汽艇や帆船、汽船、大輸送船、巨大な木造戦艦、それに数百の煙突から湧き上る煙。こういったもの全てが、活気あると同時に真に壮大な景観を作り上げており、汽笛の絶え間なく続く甲高い音や沖の岩礁に打ち付ける波の鈍い轟音がそれを彩っている。

この美しい光景の向こう側に、もしくはその背景として、この国にはあちこちに村々や、周辺の小家屋の上にたつ教会が点在しているのである。

水面から突き出し、建物の頭頂がまるで浮いているかのようにみえる霧状の霏の中から朝一番の日の光が差し込んできたときにこの光景を眺めるか、それともマルタがそのために有名とされる静かな一夜の、耀く月の光が波濤で遊んだり、巨大な隣接する要塞と索具やけた端のついた船舶の輪郭を徐々にはっきりとさせたりしつつあるときにその光景を展望するか。いずれの場合でも、その効用は常に印象的で浪漫的である。この快適で面白い眺望を描き出す要塞の最上部からみえる、過去の出来事を記録した神聖な記念碑や墓碑、墓列は、銃やその他の武器庫とも入り混じりながら、自然と芸術の両面で壮大な景色により与えられる感銘にかなりの影響を及ぼす傾向のある、哀愁漂う環境とみなされる。

反対側にある海軍造船所や製パン所、船渠の近辺（そこではかつて騎士団のガレー船が建造・修理されていた）は、今後は数百名の熟練工たちに雇用を与える大規模な工場となる予定である。これらの工場は港を隔てる入り江の先端部に位置している。かつてはこうした沿岸部は周辺都市の波止場や埠頭の役を果たしていたが、国家的な都合から帝国政府による買収が必要だったので、それらは現在、日々増加する海事業務の要請を満たすため、あらゆる種類の機械類を備え、それらを使用可能にした広大な工場を所有する海軍統治下の資産となっている。2つの入江の間にある丘の上には海軍病院があり、この恐るべき駐屯地に重要な役割をさらに加えている。港の中央には聖アンジェロの古い砦がある。この砦は、3世紀以上前のイスラム教徒による忘れがたい包囲攻撃に抵抗した際のものである。我らが祖先の勝利のおかげで、それまで恐れられ、至る所で不屈の情熱をもったキリスト教徒を攻撃していた、異教徒の自負心が初めて揺らいだのであった。

もっと先、港の入口には広域にわたる武装帯が配備されており、設置者の名を冠したこちら方面の最後の砦となっている。検疫目的で確保されることから、その他の港には武装を施した小島と検疫所がある。この水域では連絡船や汽艇が、スリーマのかつての農業平野に最近建設された大きい郊外住宅地域とヴァレッタとの間を頻繁に定期航行している。

島内では、最近建造された、旧都と新都をつなぐ鉄道線路が都市と個々の村々とを結び付けており、2島間の連絡も毎日の汽船便の確立により最近かなり容易になってきた。7千人もの居住者がいる村々（農村）は、大きな村というよりもむしろ小さな町とみなすべきものである。それらは距離を置いて遠くから眺めてみれば、丘に横たわり、いくなれば村の中心部に屹立する教会によって常に睥睨されている一群の建築物のようである。その多くが幾ばくかの上品さを目指したのであろう住宅は、互いに極めて隣接して建てられており、住宅の大半は蔓やオレンジの木がある広々とした中庭に加え、住宅に付随する小規模な庭園を同様に有している。住宅の内部が、時に印象的な外観と一致することはめったにない。あまり曲がりくねっていない道や建物の塊りは比較対称に作られたので、近年、マルタの村落はしばしば求められる気品と魅力とを披露している。こういった村落は、隠者の静寂に取り巻かれて、ほとんど誰もいない。幾つかの村には最近クラブ（カジノ）ができていますが、村の多くでは、居住者が共用できる唯一の場所は教会か学校である。居住者たちは仕事に忙しく、さもないと畑仕事に従事しているので、村落は人気のない場所のように見受けられる。多くの人々がみられる日は日曜日やその他の祝日だけである。手押し車や首の回りにつるした荷籠で運んでいる商品呼び上げながら、街路をうろついている行商人の一本調子な呼び声や、織工が使う織機のカタカタイいう音、金床に鍛冶屋の金槌が打ち付けられる音を除いて、日中に聞こえるものは何もない。夜の静けさを破るのは、時折の犬の遠吠えや時を告げる教区の鐘の音だけである。

冬季には、遮るものは路地にある店でほのかにチラチラと揺らめくランプの光だけしかない夜の暗闇が、通行人たちを憂鬱にさせ危険に陥れるが、しかしながら夏季には、月明かりのおかげで隣人同士が玄関先で会ったり、そこでそのまま数時間に渡っておしゃべりや日中の珍しい出来事についての意見を交わしたりと、夜は活気に満ちている。別に散文的ではない韻律を頼りにしながら、地方の芸人一座がギターの伴奏に合わせて皆がよく知る歌を歌いつつ通り過ぎていく。夜半過ぎに店々は閉まり、巡回中の警官たちが寂れて音のない村の通りをゆっくりとした歩調で進むなか、村人たちは心静かに明日を待ちながら平穏な眠りへと床につく。

絶えず外来者が訪れるので、マルタでは特に都市部で訪問者にあらゆる快適さが提供されている。マルタのホステル、23のホテルやレストラン、年に2シーズンの公演が行われる劇場、15のクラブもしくは「カジノ」、4つの喫煙室、多数の様々な店舗はいくまでもなく、2つの体育館、読書室がある3つの図書館、外国新聞一紙のほかに22紙の地方新聞など、その恩恵は住民か訪問者かを問わず提供される。このような素朴な気晴らし方法の多様さに加えて、ほぼ日常的に行われている『祝祭』がある。それは例えば、競馬や国民的な音楽隊、農芸展覧会、山や海への旅行、その他言及しきれないほど多くの娯楽である。これらの娯楽物と尊敬される穏やかな人々に囲まれながら、生命と財産は用心深く護られ、何件かの痴漢騒ぎを除いて、静かに時間が流れていくのである。

公衆衛生は綿密に配慮され、「ローマ人の決意」、つまり都市の下水設備の改良が始まって最

近完了した。100名を越える開業医と、50ヶ所の官営・私営の診療所が国民に奉仕している。

ほとんどが一般市民の進歩的な敬虔さにより設立され、部分的に運営資金も提供されている慈善施設は、この国の博愛精神の象徴である。

軍民合わせて5つの病院があるほか、難病者のための治療施設が2ヶ所、それ以外には高齢者や虚弱者のための医療機関、資産家により設立され多大な寄付が行われた、親のない女兒のための新しく立派な施設、ある女性により近頃に設立された女性用の更生院があり、さらには救貧院が間もなく建設されるところである。また年配の恩給生活者たちがいる貧民救済修道女会や、児童の訓練や教育のためのイエズス修道女会、聖ヴィンセント・デ・ポール慈善協会もある。実際、思いやりの心を苦しめる困窮や苦痛の緩和を目的に熱心に骨を折る、様々な慈善支援者たちの積極的で不屈の尽力は、いろいろな場所でみたり感じたりすることができる。

南天にある太陽の光線によって魅力を増した恒常的な青空が、この居心地の良い小島を覆っている。荒天は稀で、あっても短時間である。マルタには真の意味での冬はなく、一年を通して温暖な気候が勝っている。暖炉やストーブは主に装飾目的で部屋の中に設置されており、結霜には馴染みがない。温度計が華氏90度に達する夏の炎天下の厳しさは絶え間ない海風によって緩められ、秋が徐々に盛夏の熱気を薄れさせ外気を和らげるなら、清新な美しさを持った春は、こういった穏やかで温暖な風土において、この晴れ晴れとして雲一つない空のもと、天地創造という太古の時代を思い起こさせる。

しばしば起こるのは、平穏と快適という形で提供されている島の多くの美点に魅せられて、訪問客たちが自身の故郷を忘れ、我々との居住を定めがちになることである。ただし他に、病気を改善し、衰弱した体に強さを呼び戻す術を与えることで、当地を彼らの行楽地にしようとする者もいる。そういった大地が、マルタという文明化と信仰の面において素朴な、少ない人口の人びとの住み処である。それもまた他と非常に異なるマルタの特徴として誇るべきものである。

全ての文明国と同様に、マルタの住民は少数の教育を受けた者と大多数の無教養な人々で構成されている。しかしながら教育を欠いてはいても、この大多数の人々は社会的な活動や、日頃の行いを管理する宗教的な影響によって十分に統御されている。我々の現在、そして過去の統計資料からは下層階級の禁酒・節酒活動が行われてきた様子がうかがえる。この興味深い事実は、我々が詳細に調査し今まさに参照しようとしている統計資料により確証づけられるものである。

最新の国勢調査では、現地人150名と他国の入居者20名が拘置所に収監されていた。

これらの犯罪者が属する各居住者の人数（当時は島内に現地人14万7,209名とその他の在留者2,573名がいた）を考慮すると、それが現地人であれば1/982、他の居留者であれば1/128という、同等ではない割合であることがわかるのであり、それは後者の社会的状況や教育が我々に勝っているにも関わらず、前者の平均的な倫理観がかなり高いことを証明している。他の文明

化された人々よりも8倍勝る我々の倫理観について示しているこの割合の相違は、唯一我々が他の場所でも例証としてあげることのできる根拠に起因している。つまり、寛大な考えをもっていることを示すため、我々が否定したいとは思わない清廉な良心が、我々の心の奥底にある感情に訴えかけ、人々を監視し、彼らの顕著すぎる放埒を抑止することで、力強く健全なブレーキ役を果たしているのである。

マルタ人の宗教はローマカトリックである。マルタ人は自らの信仰の古さを実に自慢するが、それは時間という観点でいえば、ローマにだけ遅れた、十二使徒の時代から始まるものである。マルタ人は信仰と父祖への宗教的な敬意の点で強い意志を有している。マルタ人にとっての宗教は無用な説教などではなく、教育と自制に役立っている。その誠実な信仰心は時に、懷疑主義の進行とその時代の不道德とで人々の進歩を測ろうとする個人により、不当にも盲信や無知とみなされてきた。教会の特権への嫉妬や、偉大な国家の良い評判と品位を貶める廉直な倫理観からの逸脱に対する頑迷さなど、マルタ人は自身の宗教を守ろうとするため、その後に持ち上がるかもしれない危険性や結果に対して思慮深いとはいえないのである。

特に礼拝所の壮麗さへの熱狂に関して、マルタ人は新しい聖堂の建立を絶えず援助しており、教会に相応しい祝祭の儀式に気前よく貢献している。

マルタ人は常に、忠誠と往々にして大げさだと伝えられるほどの正義感、そしてそれゆえの訴訟への愛着に特徴づけられてきた。逆境では忍耐や我慢強さを発揮するが、マルタ人は危機にさらされると勇敢で大胆不敵になる。あまり知られていないことだが、自身の防衛に対処するか、それとも他者の防御に取り組むかのいずれかで、マルタ人の度胸は彼らを役に立たなくするのである。

外国人との争いでは、マルタ人は活動力や機敏さ、勇敢さの点で彼らをしのいでいる。このような点の全てに関し、この種の概説を書く作家たちに除外も隠匿もされるべきではない欠点を、それがいかにわずかばかりのものであらうと、マルタ人が看過することはない。我々も至らぬところや短所を持っている。しかし我ら自身の弱点を白状するが、我々は数人の犯意が常に無差別にあらゆる結果の原因とされるような、漠然とした不合理さをただ排除したいだけなのである。さらに一步踏み込んで、我々は厳粛な倫理的重要度に応じて気を配ることができるのであり、大多数の人々の公正さと率直さは我々に与えられた真の是正の手段、いや少数者の腐敗や放蕩に対する守護壁である。身分低き生まれの人物でさえ自身の評価を誇りとしており、公の批判を恐れるので、良い評判を失ったり他者からの尊敬を剥奪されたりしないよう、常に細心の注意を払っている。ただし名誉と法が許す範囲内での自己愛という感情は、しばしば十分には評価されないものでもあるが。

あらゆる島住まいの人々、特に小島に住まう者たちと同じく、マルタ人は情熱的に故郷を敬慕している。旅に出て世界のあちこちで生活しているのは確かだが、考えるのは故国のことばかりで、旅立ちに際しては涙を流すのである。

マルタ人は、海外にいて幸運に恵まれているときでさえ生まれた場所を恋しく思い、以前がどんなに貧乏であったとしても故郷再訪を切望し、そしてそれを叶えようとする。

世界のどこに赴こうとも、マルタ人はその流儀と習慣を自身とともに携えていく。自身の故国では同郷人と仲が良いことはめったになく、いつも競争相手と衝突してばかりだが、異国の地では友情を求め、味方を守るためにかつての諍いを全て水に流すのである。

本当に大いに嘆かわしいのは、非難すべき人格を持った人々のなかには、出奔することで当地を彼らの存在や結果的に彼らが常に犯す悪事から解放することにはなったものの、異国でさらに自堕落になり、同郷人の評判を貶めている者もいるらしいということである。

この国を捨てた輩のなかには、逮捕や訴追を免れるために逃亡した者もいれば、自発的に失踪したと思しき者もいるが、禁止された商売を営むのに十分な余地を国家が彼らに与えてこなかったことから、彼らには司法が警戒の眼差しを向けていることがわかる。

どのような階級に属するマルタ人女性であっても、彼女が公的な生活の栄枯や一般的に男性の分野とされる他の職業に関与することはない。家庭が彼女の領分であり、家族の幸福が彼女の心配の種である。慎み深さはとても大切にされており、そのせいで彼女の優秀さや能力が時に犠牲にされるほどである。強制する必要がないほど、女性の高潔さや貞淑さが用心深いまでに大事にされている点で、おそらく世界中を探しても他に比肩する国はない。誠実さは広く浸透した規範だが、下層階級ではあまり用いられない規範でもあるのは、劣悪な貧困の影響が唯一の例外だからである。堕落した女性は、大抵は海外から連れ込まれる。マルタ人女性はほとんどの贅沢という規範に進んで適合しようとする。それは、どんな事情があろうと文明国なら何処でも受け入れられている規範である。田舎娘は宝飾品が好きで、人前に出る時には必ずそれをかなり自慢したがるのに比べ、マルタの淑女がファッション誌を参考にしそこなうことはない。そして、そういった女性が犯罪登録簿でみつかることはほとんどない。拘留される女性の数は平均して、8千人中10～12人で推移している。

マルタ人の種別はヨーロッパや西アジア、北アフリカに居住するカフカス人種に属している。男性は色黒で生き生きとした目をしており、独特で表情豊かな顔立ちをしている。女性は印象的な容貌で、黒い瞳、上品な物腰をしており、東洋女性の美しさとラテン人の寛容さとをその身でひとつに結び付けている。

非生産的な財を保有するマルタの資本家たちは数多くいる。損することを恐れるあまり、彼らは財宝を溜め込むかのように金を蓄える。最近の通貨危機は、島内に多額の金（外国の貨幣でさえ）が存在することについて十分な証拠を提供した。この豊富な金は財に関する絶対的な符号ではないが、それは単純に節約癖と勤勉さの成果である一方で、しかし広い土地を持たず他の収入も不十分な人々が、そのような多額の財を忍耐力と純粋な勤勉さだけで蓄積し、所有しているというのは素晴らしいことでもある。

当地の貧困が飢餓につながることは減多になく、これまで飢え死にが起こったとは聞いたこ

とがない。貧困は特に中産階級において存在しており、純粹に貧乏で物乞いを余儀なくされた者もいる一方、それを生業としている者もいるが、どちらの境遇もその人数は限られている。彼らは現地人よりもむしろ外国人に物乞いをするので、乞食には街路で遭遇しやすい。しかし15万9千人の人口中で常習的な乞食は170人しかいないことを考えると、幾人かがそうしているようなそれを普及した慣習とみなす限り、この社会的な害悪を過大視するのは無駄なことである。

この国では多くの言語が使われており、あらゆる国との定期的な貿易上のやり取りがそれで行われている。公用語は英語である。イタリア語は書き言葉だが、現地人には気楽な雑談でも使用される。その一方で、聖職者や他の知識人はフランス語やアラビア語はいうまでもなく、ラテン語やギリシア語、そしてその他に知られている言語にも精通している。

要するに、この国とその居住者の概要は以上のようなものである。産業と人々の営みについては次頁〔第1章〕の主題を成している。

第3章 産業の障害

当地の産業に関しては、その活力を幾分か失わせ達成すべき完成度への到達を妨げてしまう、多くの欠点が認められる。我々がこれらの短所を隠すことはない。ただ事実を確認し、我らの産業的な凡庸さの弁明に役立てるだけである。我々は単にこの告白によって、ある種の地元の偏見と、その発展と進歩の道上におかれた障害について糾弾したいのである。

他の地域同様、当地でも熟練職人層への教育の不十分さに起因する欠陥がみられる。我々には実地訓練や成功するために必要な手段を得られるような大組織が存在しない。他の人々よりも上位に位置するある階級の人々の気高さも、不運なことに、我々の地元産業への後押しというよりもむしろ障害となってしまっている。なにより、彼らは地元産業への支援を最大級の侮蔑のまなざしでみているのである。こういった人々は雀躍して仲間たちよりも上座に立とうとし、実際の状況を理解するよりもむしろ漠然とした印象にすがって生きようとしている。非常に残念に思うのは、多くの間違った意見があるにせよ、我々が保有しているのが未だその真価を認められない産業、いわば思慮深い人々の賛同を得ずただ労働の力のみで存在している産業だということである。独りよがりな思い違いや虚栄心の強い動機によって惑わされる代わりに、想像力という名の空虚な幻影を生産的で実り多き活動的な生活という現実に変換することで、この状況でも我々の愛国心はずっと良いものになるだろう。まさにこれは我々が真面目に考慮すべき希望であり、世襲の慣例で不変かつ揺るがし得ないほど強固な連携が、科学的な理論と実際の労働との間に形成されるだろう。実践的な知識が必要とされるのは、将来的に実業の中心地を作り出さんがためである。技術の向上や商業の発達、とりわけ、辛抱強いが無知でもある小作農の手に完全に委ねられているおかげで未だかなり旧式の状態にある、全産業の根本た

る農業に、よりはっきりとした指針を幾らかでも与えるべきであろう。早い話が、耕作者への関心とそれとの協力が不動産所有者たちにとっても、現在もたらされている年収以上の大きな収益となることを彼らに納得させるために、不動産所有者と協力して約束事を作ったほうがよいのであり、それは彼らにとっても自身の満足感や生活環境向上の源泉となるのである。

種々の階級間をつなぐ公益共同体についてのこの難解な論理で、この人々が労苦を厭わず、活発さと節制という評判を得ているという明白な事実にまで考えをめぐらせてみよう。働く活力は国の主力産業の本質を成している。おそらくこの世で、このように働くことを熱狂的に愛し、怠惰を嫌い軽蔑する人間は、マルタ人をおいて他にはあるまい。

もし故国が彼に就業の機会を提供しないなら、マルタの労働者たちは故郷や彼らにとって大切なものの一切を捨て、強靱な腕と天成の才覚を用いて、よそ者たちに混じって道を切り開こうとするだろう。このような理由で、故国に残る者たちよりもより多くのマルタ人たちが、世界のあちこちで身を立てる術をみつけんとしている。マルタの労働者、特にもし彼が頑強な部類に属しているなら、彼は文字通り疲れを知らないほど労苦に慣れているのである。辛い労働の後、娯楽のために残された時間はいつも僅かであるが、彼はそこで自身の実直な就労によってもたらされた生活の幸せを理解することができる。非常に厳しい仕事で一日を過ごした後、仕事に行って戻ってくるまでの間にしばしば一日10-12マイルを歩いてから、彼は低い屋根の下で身内の人々と平穏のなかで夕刻を過ごす。夜間も、完全に睡眠や休息に当てられるよりはむしろ、専ら他の用事や役立つ家業に時間を費やす。朝、それどころか日が差してくる前でさえ、彼は自分の仕事に従事し、日暮れ時までそれを止めることはない。正常な状態で常に耐久力を維持するための、健康に良い食物は主に菜食から成っており、衣類は軽く、結果として仕事の妨げになることはない。腕まくりし裸足のままで、彼は何事もないかのように冬の寒さと夏の暑さに耐えてみせるのである⁽⁷⁾。

実際、マルタ人は驚くべき耐久力を授けられた生ける機械であり、仕事をする際にはその正体を如何なく発揮している。しかし彼に欠点がないわけではない。伝統的な慣習を曲げぬので、まるで各職業の制度や手法に革新が仇を成すかのように、あらゆる革新に対して我らの熟練職人層は反感を持つ。祖先から受け継いだ教えを優先する強い偏見を持つがゆえに、盲目的に古い慣習に従い、教えで知られていること以外に信をおくことはない。新しい知識や新しい制度へのこういった不信が技術の揺籃期にそれを留めおいているのであり、あらゆる発展を妨げ、それをほとんど不可能足らしめている。

同様に、古い慣習に対するこの意固地なまでの執着にある種の盲目的な服従が付け加わっているのに相違なく、それが技術的な知識に関してさらなる進歩とそれからより大きな利益を引き出す好機の両面において、マルタが凡に甘んじている理由である。これは一般的に国内の労働者階級によって受け入れられた、近代化の間違った見解に起因しており、彼らは自身が現状で得ているもの以上に興味を示すことはないのである。

毎日のパンを得られることに満足しているため、彼らは少しも労働の成果について熟慮したとは思わない。熟練職人たちは、慎重な節制により自身とその家族にとっての権能をうまいこと確かめられるなら、わざわざ危険を冒したいとは思えないし、自分たちが毎日の仕事を増やすことですぐに蓄えられる適度な収益で満足するのである。であれば、マルタの活気に欠ける産業は隔離されることで、そして構成要素の衝突によって成長することにつながるかもしれないのである。

しかしながらマルタの地元産業を損なう最大の元凶は、共助的な精神や相互の信頼関係、そして資金提供を生み出したり、大規模な会社や作業場を創設したり、労働収益の増進や教育の利点と物的生産の改良および発展との交換のための、こういった強力な手段により提供しうる力の一致団結が我々の間に欠けていることから生じている。

我々のあらゆる最善の利益にとって致命的な、この嘆かわしい軋轢を解くための話し合いがしばしば催されてきた。軋轢は概して人々の持ち前の性格のせいだとされてきた。この公共経済に関する事象に、今まで顧みられてこなかった瑕疵や残念ながら認めざるを得ない欠点が存在している。巧みに隠された独占が産業面での連合に関わる全ての希望を打ち砕き、この国における労働の生産力を抑制している。巨万の富を有する上流階級の財産所有者たちは、進取的で生産的な地域社会の代行人として君臨し、副次的な活動の経路は全て、これらの手ごわい障害によって遮断される。技術や労働力、信用、取引といった、あらゆるものはこの向う見ずな傾向に向かう単なる支流に過ぎず、この国の意欲的で有用な力を全て連れ去ってしまう。このように、数人の懐具合が多数の人々の工業的成功を妨げる障害になっているのである。同時に適当な産業組織やあらゆる階級・資産の連携が不足しているので、国家の生産力をしっかりと結合させる目的に際して、この分裂と反目は、考えうる物質的繁栄にとっての不変の障害であり続けるだろう。

資本家たちの一体化は間違いなく、国に重要かつ重大な成果をもたらすことができるものであったし、国の力はある程度とはいえ公平に吟味されてきた。しかしながら、もしこれまで同種の事業により被った損失やその他の投機的で産業的な企業に与えられた損害が、人々がその事例を辿ることを留まらせているなら、これらの成果は主に、実際の経営やこれらの近代産業に関する有効な手段の適切な扱いをめぐる、知識への欲求から生じていることを念頭においておくべきだろう⁽⁸⁾。

そういったものがあらゆる向上心や最良の努力を惰弱にしつつ、我が国の産業の発展を鈍らせている諸因である。我々は、見落とされたり軽視されたりしてきた多くの強みの理解に、この国がようやく前向きになり、過去において知識とより良い指導の不足によって被った損失や十分に検討され証明されてきた必要性を、良い意味で未来が埋め合わせてくれることを期待するものである。

〔原註〕

(1) 「マルタ人の愛が ヨーロッパの声とも相俟って これらの島々を 偉大にして不屈のブリタニアに確保せしむ」(1814年)

(7) 地上にせよ海上にせよ、マルタ人労働者は得難い勇敢さを披露する。彼は一流の船乗りになれるし、同時にこの辺りの港湾での仕事に際しては、とても有用な肉体労働力でもある。

地中海の他の港湾では、これほどまで積極的かつ敏活に仕事が遂行されることはない。多数の汽船（ほとんどはイギリスの）が日々マルタに入港しており、そこでは6千トン程度の石炭の積み入れ作業が行われ、その他の商品の荷積みや荷卸しがされている。他国同様、イギリスの商船も出航準備や他の作業のために我々の商港を選んでいいる。

概してマルタは世界でも最良の民族が住まう土地であり、住民の忍耐力は他国民のそれよりも優れている。マルタ人はあらゆる作業に耐えるだけでなく、異なる気候の影響をものともせず、それを克服さえするのである。

著名なドイツ人フィルヒョー [Rudolf (Ludwig Carl) Virchow (1821-1902) : ドイツの病理学者、人類学者、政治家] は最近の科学会議で、以下のように自身の考えを述べている。

「気候馴化に関して、白人種の諸部門間で大きな相違が存在します。セム系民族はアーリア系よりはるかに優れております。南方の人々、つまりポルトガル人やスペイン人、マルタ人、シチリア人はこの点において北方の人々より優れており（中略）。アフリカ大陸に移住し、それが海岸から遠く離れていたとしても、マルタ人はスペイン人よりもさらに気候の変化を感じるといわれています。なぜならスペイン人は大陸性気候のなかで育つからです。しかしながら、そのような話は真実ではありません。アルジェにてマルタ人はこの点に関し、常にスペイン人以上に自身の決定的な優越性を維持しているという肯定的な事実を、統計が立証しております。（中略）この人種特有の忍耐力は母国の気候や移住先の国の気候に関係はしないのです。異国人との混血を考慮に入れなければなりません、この血統はほぼセム系です。当時の制海権に類するものを所有していたフェニキア人は、歴史上に知られた最初の植民者たちです。フェニキア人たちはセム系人種で、彼らの馴化に関する考古学的な痕跡の多くが今でもみつっております。」

（フィルヒョーによる、ストラスブールで開催された科学会議、1885年9月22日の席上での発言。『科学評論』1885年12月12日号より）

(8) 2-3年の間に下記の会社や団体が破産している。

- ・豊富な資金を有して出発した穀物企業。
- ・見事な帆船隊を保有し、我々の埠頭や船架を建造した水運会社。
- ・乗合馬車会社。
- ・マルサ [南東地区に属する町] の製紙工場と、短期間で廃業したあまり重要度の高くない幾つかの他企業。こういった不幸な経験を教訓に、本島で繁盛するかにみえる産業組合は、その構成員たちに純粋に精神的な支援のみを要求するものである。
- ・現状で存在している団体は、農業組合と技術・商業団体、考古学協会である。
- ・数年間にわたる隆盛の後に、医師会は活力と激励の不足を表明するのを止め、最近落成式を行っただけの医学会館は既に過去の遺物となっている。他の団体もあるが、それらに公的な重要さはほとんどない。商工会議所は、存続の兆候を示しその義務をきちんと履行している唯一の存在である。裁判所内に席を置く弁護士会はその構成員が属する専門職協会であり、法律専門家の要望を監督している。

（みずた とものり 歴史学科）

2019年11月14日受理